



年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

「イエスの教え」を通して人々に注がれる神の憐れみ

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」(6・34) 弟子たちが、初めての宣教活動できっと疲れて帰ってくると思い、イエスは戻ってきた弟子たちに「人里離れたところへ行って、しばらく休むがよい」(6・31)とねぎらいます。

しかしご自身は休むこともせず、ひっきりなしにやって来る群衆のお世話をし続けました。「いろいろと教え始められた」(6・34)というのがイエスのなされたことだったのですが、なぜ「教えること」を選ばれたのでしょうか。

集まってくる群衆は、もしかしたら何か奇跡をしてもらえんと思っで集まっていたかも知れません。そんな群衆にあえて「いろいろと教える」というのは遠回りのようにも思えます。

「あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。」(ルカ 11・11-12) 魚を欲しがっているなら、魚を与えるのが手っ取り早いと言えるかも知れません。

しかしこのようにも言われています。「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(同 11・13) 今回の朗読で「いろいろと教え始められた」というのは、目の前のものも大事ですが、もっと大切な物を与えようとしておられるのだと考えることもできます。

「教える」「教育する」ということが大切なのはだれもが理解できることです。以前ある映像を見たとき、教育が人間だけでなく動物でもおこなわれているのには驚きました。神様は、教えることで「目の前のもものよりも大切なものを与える」という本能を、動物にも与えておられるのだと、映像を見て思いました。

その映像とはこういうものです。大人の象が、水飲み場からなかなか上がれないでいる子どもの象に陸への上がり方を教えている映像でした。本当は長い鼻を使ったりして子どもの象に力を貸せば、簡単に水の中から引き上げられるのに、大人の象たちがわざわざ、足の着き方、体重のかけ方を何度も何度も実演して、その子ども象が自力で上がれるように教えていたのでした。

私も、その映像を見ながら「そうだよな」と理解しました。水飲み場からなかなか陸に上がれない。そういう場面は今後何度も経験するかも知れません。そのたびに大人が助けてあげるわけにはいかないのです。今、自力で陸に上がれるようになっていなければ、将来溺れて死んでしまうかも知れないのです。

本能で生きている彼らには、「教えることが救うこと」「陸上への

上がり方を教えることが本当の意味で助けること、救うこと」だったのです。それを大人の象たちは痛いほど知っているのです、決して甘やかさず、自力で這い上がる方法を、何度も実演して教えていたのです。

イエスも、目の前のことだけにとらわれて群衆に深い憐れみを示したのではありませんでした。「深い憐れみ」は、目の前のことで終わらず、羊飼いの声を聞き分ける羊になるように導く憐れみです。この場面でも、父なる神は決して群衆を見捨てたりはしない、そんなことを教えておられたのかも知れません。

「なぜあの時こうしてくれなかったのか」そう言って相手を責める人がいますが、その人が自分を本当に心にかけている人なら、先を見据えて手を貸してくれるでしょう。神のなさり方も同じです。人の心に深く刻まれる教えを通して、その人の生涯にわたって羊飼いであるイエスの導きを感じられる。そのためにいろいろと教えてくださるのです。

7月4日、マトラ神父様の帰天百年祭行事が行われました。今年の小中学生の黙想会で、「マトラ神父様の働き」を材料にして黙想会を開こうと思っています。マトラ神父様がその時手がけた取り組みが、百年後の今も受け継がれています。マトラ神父様も、当時の平戸の神の民が「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」のです。

黙想会は、特定のことをテーマにして学ぶとても良い機会です。マトラ神父様の、平戸のキリシタンたちに対する深い愛が今の子どもたちにも理解されて、将来、神の国のために良い働きができる人に育ててほしいと願っています。いつか、「小学生のときにマトラ神父様のことを学んだなあ」と思い出してくれて、その時あらためて神父様の働きを振り返ってくれたら幸いです。